

## 「イエシュアの福音のはじめ」

マルコの福音書 1:1~5

### はじめに

今回からマルコの福音書の講解メッセージをさせていただきたいと思っています。この福音書の筆者であるマルコという人物は、イエシュアの12使徒ではありませんが、イエシュアを目撃し、使徒たちの時代をともに生きた人物です。12使徒の筆頭、ペテロは彼を「私の子マルコ」(Iペテロ5:13)と呼んでいます。またこのマルコは使徒パウロの同労者バルナバの実のいとこ(コロサイ4:10)であり、彼らとともに宣教の旅に同行した人物でした。また使徒パウロはこのマルコについてこう述べています。「彼は私の務めのために役に立つ」(IIテモテ4:11)と。このようにマルコは使徒たちとともに働き、そこで訓練され、その指導のもとでこの福音書を書いたと考えられます。

### 1. 福音のはじめ

#### ①はじめ

【新改訳改訂第3版】

マルコの福音書

1:1 神の子イエス・キリストの福音のはじめ。

「神の子イエス・キリストの福音のはじめ。」日本語で訳すとこのようになりますが、ヘブル語では以下ようになります。

← (ヘブル語は右から左に読みます。)

תְּחִלָּתַ בְּשׁוֹרַת יֵשׁוּעַ הַמָּשִׁיחַ בֶּן־הָאֱלֹהִים  
神 子 メシア イエシュア 福音 始め

このように、ヘブル語ではテヒツラット(תְּחִלָּתַ)、「始め」という意味の名詞テヒツラー(תְּחִלָּה)という言葉がこのマルコの福音書で最初に記された言葉であることが解ります。それだけにこの言葉は重要であると考え、この最初の言葉、まさに「始め」であるテヒツラーにまず注目したいと思います。この言葉が聖書で最初に使われた箇所から、その本来の意味を考えてみましょう。

【新改訳改訂第3版】

創世記

13:1 それで、アブラムは、エジプトを出て、ネゲブに上った。彼と、妻のサライと、すべての所有物と、口もいっしょであった。

13:2 アブラムは家畜と銀と金とに非常に富んでいた。

13:3 彼はネゲブから旅を続けて、ベテルまで、すなわち、ベテルとアイの間に、初めに天幕を張った所まで来た。

13:4 そこは彼が以前に築いた祭壇の場所である。その所でアブラムは、【主】の御名によって祈った。

これは飢饉のために一時的にエジプトに避難していたアブラムが、再びカナン之地である「ベテル」に戻って来たことが記されている箇所ですが、ここで『『初めに』天幕を張った所』という部分に聖書で最初のテヒッターがあります。このように、テヒッターとは「天幕」すなわち当時の「家、住まい」を指し示し、更にそこに「祭壇」すなわち礼拝の場、神と人が交わる場が指し示されていると考えられます。しかもこの「祭壇」はただの祭壇ではありません。

【新改訳改訂第3版】

創世記

12:7 そのころ、【主】がアブラムに現れ、そして「あなたの子孫に、わたしはこの地を与える」と仰せられた。アブラムは自分に現れてくださった【主】のために、そこに祭壇を築いた。

このように「祭壇」とは、アブラハムの子孫、つまりイスラエルの民に「わたしはこの地を与える」という神の仰せ、神の約束を覚えるためのものであると考えられます。そして「ベテル(בֵּית־אֱלֹהִים)」とは「神の家」という意味ですから、テヒッターには「初めに」神がご計画された、神と人がともに交わり、ともに住まう「神の家」に戻る、帰るといふご計画が指し示されていると考えられます。この「神の家」である「神の国」を求め、そこに帰る、入ることが神にとっての、そして私たちにとっての最も優先されるべき第一のものであることは、イエシュアご自身がはっきりとこのように述べておられます。

【新改訳改訂第3版】

マタイの福音書

6:33 だから、神の国とその義とをまず第一に求めなさい。

ですから「始め」とは、ヘブル語の視点で考えるならば、アブラハムの子孫であるイスラエルの民に対する神の約束、ご計画である「神の家、神の国、御国」を指し示す言葉であると考えられます。

②福音

← (ヘブル語は右から左に読みます。)

תְּחִלַּת בְּשׂוּרַת יֵשׁוּעַ הַמָּשִׁיחַ בֶּן־הָאֱלֹהִים  
神 子 メシア イエシュア 福音 始め

そして次に「神の子イエス・キリストの福音のはじめ。」の「福音」について考えてみましょう。この言葉は、ヘブル語ではベソーラー(בְּשׂוּרָה)という名詞が使われており、IIサムエル記 4:10 にその最初の言及があります。

【新改訳改訂第3版】

IIサムエル記

4:10 かつて私に、『ご覧ください。サウルは死にました』と告げて、自分自身では、良い知らせをもたらしたつもりでいた者を、私は捕らえて、ツィケラグで殺した。それが、その良い知らせの報いであった。

この言葉はダビデが語ったもので、Ⅱサムエル 1:1～16 に記された出来事についてのものです。ダビデはその当時イスラエルの王であったサウルに命を狙われていました。しかし一人のアマレク人によってサウルは殺され、アマレク人はサウルの死を「良い知らせ」、「福音」ベソラーとしてダビデのもとにもたらしました。しかしダビデはそれを喜ぶどころか逆に「主に油注がれた方を殺した（サムエルⅡ 1:16）」と言って怒り、そのアマレク人を殺してしまいました。このようにベソラー「良い知らせ」とは本来、確かに良い知らせではあるが、しかしそれを伝えた者は殺される、という意味があると考えられます。ですから「神の子イエス・キリストの『福音』」とは、神の「福音、良い知らせ」を伝えるために来られたメシアであるイエシュアが殺されること、すなわちイエシュアの十字架の死が指し示されていると考えられます。

### ③子

このように、ヘブル語の視点で考えるならば、1:1「神の子イエス・キリストの福音のはじめ。」とは、アブラハムの子孫、イスラエルの民に約束された「神の家、神の国」という「良い知らせ」と、それによって殺される、神の御子イエシュア、メシアであるイエシュアの死を指し示したものであると考えられます。ちなみにイエシュアは「神の子」ですが「子」のことをヘブル語でベーン(בֶּן)と言い、その最初の言及に「子」とは本来どのような存在であるのかが指し示されていると考えられます。

#### 【新改訳改訂第3版】

#### 創世記

3:16 女にはこう仰せられた。「わたしは、あなたのうめきと苦しみを大いに増す。あなたは、苦しんで子を産まなければならない。しかも、あなたは夫を恋い慕うが、彼は、あなたを支配することになる。」

これは罪を犯した最初の女、エバに対して神が仰せられたものです。「苦しんで『子』を産まなければならない」という箇所に最初のベーンがあります。このようにベーン「子」とは本来、「うめきと苦しみ」をもたらず、指し示す存在であると考えられます。この概念は「子宝、子はかすがい」などと称される一般的なものとは大きく異なることが解ります。しかし事実、御父である神は、ご自分の「子」であるイエシュアを天から地に下らせ、私たちと同じ痛みや病、飢えや疲れを覚える肉体を与え、迫害などの苦難に遭わせ、ついには十字架という最もむごいやり方で死に至らせ、さらには地の下、死者の世界であるよみにまで下らせるために遣わされたのです。これらの一部始終を見ることは「子」を愛する父にとって「うめきと苦しみ」以外の何ものでもありません。もしあなたの目の前で、何の罪もない人が大勢の人に取り囲まれ、死ぬまで暴行されていたとしたらどうでしょうか。もしその人が自分の子、愛する人であったとしたら…想像するだけでも心が締め付けられるような思いです。ですから御子イエシュア、「神の子」とは、御父である神の「うめきと苦しみ」とも言い換えることができると考えられます。しかし神はそのような思いをしてまでも、大きな犠牲を払ってでも「始め」テヒツラーという言葉に指し示された「神の家、神の国」を建てようとしておられるということが、このマルコの福音書の冒頭に掲げられていると考えられます。

このように「神の国」のご計画のために大きな「うめきと苦しみ」を味わうという多大な犠牲を払う神、そしてそれを命がけで成し遂げようとする「神の子」。ヘブル語の視点で見るとこの 1:1「神の子イ

「エス・キリストの福音のはじめ。」という言葉は、単なる表題、さらっと読み流して良いイントロダクション的なものではなく、この福音書全体を表すほどの重要な意味を持った言葉であると考えられます。

## 2. 整える

1:2 預言者イザヤの書にこう書いてある。「見よ。わたしは使いをあなたの前に遣わし、あなたの道を整えさせよう。」

1:3 荒野で叫ぶ者の声がある。『主の道を用意し、主の通られる道をまっすぐにせよ。』

1:4 バプテスマのヨハネが荒野に現れて、罪の赦しのための悔い改めのバプテスマを宣べ伝えた。

「預言者イザヤの書に」となっていますが、1:2「見よ。わたしは使いをあなたの前に遣わし、あなたの道を整えさせよう。」という部分は実際にはこれはマラキ書 3:1 からの引用です。

【新改訳改訂第3版】

マラキ書

3:1 「見よ。わたしは、わたしの使者を遣わす。彼はわたしの前に道を整える。あなたがたが尋ね求めている主が、突然、その神殿に来る。あなたがたが望んでいる契約の使者が、見よ、来ている」と万軍の【主】は仰せられる。

このように、前半部分は明らかにマラキ書 3:1 からの引用です。そして後半部分の 1:3「荒野で叫ぶ者の声がある。『主の道を用意し、主の通られる道をまっすぐにせよ。』」は、正真正銘イザヤ書からの引用です。

【新改訳改訂第3版】

イザヤ書

40:3 荒野に呼ばれる者の声がある。「主の道を整えよ。荒地で、私たちの神のために、大路を平らにせよ。」

なぜ筆者であるマルコは前半のマラキ書からの引用を、後半のイザヤ書のもの結びつけて「イザヤ書」としたのでしょうか。それはマラキ(מַלְאֲכִי)という名前が「使者、御使い」という意味であるため、人の名前、固有名詞ではないと解釈されたためではないかという説があります。また「イザヤ書」は聖書の預言書の中で最も長く、代表的なものであるため、全預言書の総称的に用いられたとも考えられます。実際にヘブル語の新約聖書ではこの部分を「イザヤ書」とせず、ネヴィーイーム(נְבִיאִים)訳すと「預言書、預言者の書」とするものがあります。いずれにしてもこれらの預言は「バプテスマのヨハネ」という一人の人物を指し示していると筆者マルコは記しています。そしてこの「バプテスマのヨハネ」の働きとはただ一つ、主の「道を整える」ことでした。これをマラキ書もイザヤ書もともにパーナー(פָּאֵר)という動詞を用いています。つまりこのパーナーはマラキ書とイザヤ書からの二つの預言を結びつける、共有する動詞であり、鍵となる重要な言葉であると考えられます。ではこのパーナーの最初の言及からその本来の意味を考えてみましょう。

【新改訳改訂第3版】

創世記

18:20 そこで【主】は仰せられた。「ソドムとゴモラの叫びは非常に大きく、また彼らの罪はきわめて重い。

18:21 わたしは下って行って、わたしに届いた叫びどおりに、彼らが実際に行っているかどうかを見よう。わたしは知りたいのだ。」

18:22 その人たちはそこからソドムのほうへと進んで行った。アブラハムはまだ、【主】の前に立っていた。

これはアブラハムのもとを訪れた三人の神の人が、次にソドムとゴモラの町に向かうという場面ですが、ここで「ソドム『のほうへと進んで行った。』』という箇所、聖書で最初のパーナーが使われています。この神の人がソドムにパーナー、向かって行く理由は、「ソドムとゴモラの叫び」と「彼らの罪」のためでした。ソドムとゴモラの罪が、具体的にどのようなものであったのかは、はっきりとは解りません。しかしどのような罪であれ、罪は人に益をもたらしません。それどころか人に悩みや恐れ、苦痛や悲しみを与え、最終的にはこのソドムとゴモラのように死と滅びをもたらすものです。ですからソドムとゴモラの住人たちは、自分たちの罪の中で苦しみ、叫んでいたのです。その叫びがついに大きくなり、神はそれが「わたしに届いた」と語っておられます。それによって神はソドムとゴモラにパーナー、「進んで行った」のだと考えられます。ですから「道を『整える』』と訳されたパーナーとは本来、罪人の苦痛の叫びに 대응するという意味あいがあると考えられ、そのために立てられた人物がこの「バプテスマのヨハネ」という人であったと考えられます。

### 3. ヨルダン

1:5 そこでユダヤ全国の人々とエルサレムの全住民が彼のところへ行き、自分の罪を告白して、ヨルダン川で彼からバプテスマを受けていた。

「ユダヤ全国の人々とエルサレムの全住民」がこのバプテスマのヨハネのもとに行き、「自分の罪を告白して」と記されています。多少の誇張表現ではあったとしても、当時のユダヤ人たちがいかに「自分の罪」のために悩み苦しんでいたかが解ります。彼らは「ヨルダン」という名の川に集まって来ました。この名前はヤーラド(יַרְדֵּן)「下る、倒れる、沈む、打ちひしがれる、ひれ伏す」という意味の動詞が語源であると考えられ、まさに当時のユダヤ人たちは自分たちの罪ゆえの苦しみの中で打ちひしがれ、神の御前にひれ伏すような思いであったことが指し示されていると考えられます。またこのヤーラドの最初の言及についても見てみたいと思います。

【新改訳改訂第3版】

創世記

11:4 そのうちに彼らは言うようになった。「さあ、われわれは町を建て、頂が天に届く塔を建て、名をあげよう。われわれが全地に散らされるといけないから。」

11:5 そのとき【主】は人間の建てた町と塔をご覧になるために降りて来られた。

これは「バベルの塔」の物語として知られる一場面ですが、ここでその塔や町をご覧になるために主が「降りて来られた。」という部分に聖書で最初のヤーラドがあります。このようにヨルダンの語源であるヤーラドには、天から地に降りて来られる神という意味あいがあり、神が降りて来られる「主の通られる道」を備えるバプテスマのヨハネにとってこのヨルダン川という場所で働きを行うことは決して偶然ではなく必然であり、大きな意味を持っていると考えられます。そして彼は、罪の苦しみにあえぐユダヤ人の叫びに応えて、天から神が降りて来られるという「福音、良い知らせ」を表すために立てられた人物であるということが示されているとも考えられます。

#### 4. バプテスマ

ではこのヨハネがユダヤ人たちに授けていた「バプテスマ」とは一体何でしょうか。これをヘブル語の視点で考えてみたいと思います。これはギリシヤ語で「水に浸す」という意味のパプティゾーという動詞に由来しますが、ヘブル語ではこれをターヴァル(טָבַל)と言い、同じく「浸す」という意味の動詞です。この最初の言及を見てみましょう。

【新改訳改訂第3版】

創世記

37:31 彼らはヨセフの長服を取り、雄やぎをほふって、その血に、その長服を**浸した**。

37:32 そして、そのそでつきの長服を父のところに持って行き、彼らは、「これを私たちが見つけました。どうか、あなたの子の長服であるかどうか、お調べになってください」と言った。

37:33 父は、それを調べて、言った。「これはわが子の長服だ。悪い獣にやられたのだ。ヨセフはかみ裂かれたのだ。」

これはアブラハムの子イサクの子ヤコブ（後のイスラエル）の、その息子たちの間に起こった事件を記したのですが、父ヤコブは「彼の息子たちの誰よりもヨセフを愛していた（創世記 37:3）」ため、兄弟たちはヨセフを妬み、彼を捕えて奴隷として売り飛ばしてしまいます。その時に兄弟たちがとった行動が記されています。彼らはヨセフの長服を取り、雄やぎの血にそれを「浸した」とあり、ここに聖書で最初のターヴァルが記されています。そしてこの血に浸した長服を見たヤコブは、ヨセフが死んだと思わされてしまうことが記されています。このようにターヴァルとは本来、水ではなく「血に浸す」という意味であり、それはすなわち死を意味します。しかし実際にはヨセフは死んではおらず、死んだのは雄やぎです。けれどもヤコブはヨセフが死んだものと思っています。つまりこのターヴァルが示す死とは、雄やぎの血に表された、身代わりの死だと言えます。これはもちろんイスラエルとそれに繋がるすべての人の罪を背負い、十字架によって身代わりの死を遂げられるイエシュアを指し示していると考えられます。

#### 5. 神の国の「型」

このように、主の道を「整える」ために立てられたヨハネが、ヨルダン川でバプテスマを授けたという行為をヘブル語の視点で考えるならば、

- ①主の道を「整える」という意味の動詞パーナーの本来の意味である「罪人の苦痛の叫びに応える」ために、
- ②ヨルダンの語源ヤーラドが指し示す「神が天から降りて来られる」ということ、
- ③そして「浸す」という意味のターヴァルの最初の言及に示された「身代わりの死を遂げられる」ということ、

これらが神の御子メシアであるイエシュアの姿を指し示していることは明らかです。ですからユダヤ人たちはヨハネからバプテスマを受けるためにヨルダン川に集まって来ていたのですが、その様子は、やがてイエシュアのもとに集められるイスラエルの民、ユダヤ人の姿が「型」として表されていたと考えられ、ここに 1:5「ユダヤ全国の人々とエルサレムの全住民」と記された理由があると考えられます。先ほどこれは誇張表現であると述べましたが、これがイエシュアの初臨、すなわちマリヤから生まれ、十字架にかかるために来られた時ではなく、再臨すなわち冒頭で述べた「神の家、神の国」の成就のために、天の軍勢とともに王の王、主の主として来られる時の「型」として見るならば、これは誇張表現ではありません。なぜならその時、全てのイスラエルの民がイエシュアのみもとに集められるからです。ミカ書 2:12 にこのような預言があります。

【新改訳改訂第3版】

ミカ書

2:12 ヤコブよ。わたしはあなたをことごとく必ず集める。わたしはイスラエルの残りの者を必ず集める。わたしは彼らを、おりの中の羊のように、牧場の中の群れのように一つに集める。こうして人々のざわめきが起ころう。

御父である神のご計画は、十字架によって身代わりの死を遂げさせるために御子イエシュアを天から地に下らせることだけでは完成しません。イエシュアを王の王、主の主として地に下らせるその時に完成するのです。それが御父のお立てになった「神の家、神の国」のご計画です。そしてそれは同時にイエシュアのみもとに全てのイスラエルの民が「ことごとく集め」られ、メシアであるイエシュアを王としたイスラエル王国の再建をも指し示しています。ですからこのように聖書において、そこにイエシュアが表されている、指し示されているならば必ず「神の家、神の国」のご計画も同様に表されていると考えられます。イエシュアを見、同様に「神の家、神の国」を見る、そのような視点で、これからこのマルコの福音書を読み進んでいきたいと思われています。